

年)5月16日 月曜日

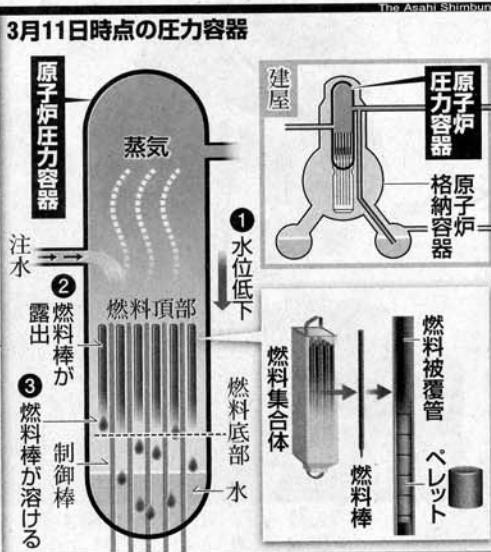
享月

三

豪斤

星

福島第一原発1号機を巡る主な動きと東電の見立て(一)	午後2時46分
	東日本大震災発生、自動停止
	3時半ごろ 津波到達 以降冷却用の非常用復水器が機能喪失
	3時42分 全電源が喪失
	4時36分 緊急炉心冷却システムが注水不能に
	6時ごろ 水位が燃料棒頂部まで低下
	7時半ごろ 燃料棒が完全に露出
	9時ごろ 炉内温度が2800度に
	12日 午前1時ごろ 格納容器圧力が異常に上昇 5時50分ごろ 原子炉に淡水注水開始 6時50分ごろ 全燃料棒が崩落 10時17分 ベント開始 午後3時36分 水素爆発 8時ごろ 海水注水を開始



溶融津波5時間半後から 東電解析 1号機燃料、全露出

東京電力は15日、東電福島第一原子力発電所1号機が、3月11日の東日本大震災による津波到達後、原子炉内の核燃料が冷却水からすべて露出し、5時間半後には燃料溶融が始まっていたとの暫定的な解析結果を発表した。これまで燃料が溶融したのは翌12日だとしてきた。事故対策の前提が大幅に違っていたことになる。

福島第一原発は、3月11日午後2時46分の震災発生直後に原子炉が自動停止。その後に原子炉が冷却水から電力を得る。設備も被害を受け停電し、さらに同3時30分ごろに津波をかぶり、非常用発電機なども被害を受け、炉心を冷やすために必要な電源をすべて失った。このため炉心では核燃料が下がり、「燃料の一部露

出」が始まった。同時に炉心

▼3面=解説結果の詳細

の温度は急激に上昇した。

約1時間半後には、全長約4㍍の燃料棒の水につかっている部分が完全になくなる「全露出」状態となつた。核燃料を包む金属の筒(被覆管)は、炉心の中央下にあるものから融け始め、20分ほどで炉心中

から全部露出した」として

東電はこれまで、1号機の炉心水位の低下傾向を確認したのは11日午後9時半ごろで、12日午前9時

9時には燃料ペレットが溶け始める2800度に達したと思われる。翌12日には核燃料がすべて原子炉圧力容器の底に崩れ落ちた。

東電はこれまで、1号機の炉心水位の低下傾向を確認したのは11日午後9時半ごろで、12日午前9時9時には燃料ペレットが溶け始める2800度に達したと思われる。翌12日には核燃料がすべて原子炉圧力容器の底に崩れ落ちた。



燃料棒

事故の進行想定以上

（解説）東電が事故発生

2ヶ月を過ぎて初めて、福島第一原発1号機の事故当初の様子を詳しく解析し

た。

原発のシビアアクシデ

ント（過酷事故）が実際に

どう進むかを示す、重い教

訓となるデータだ。

東電が今回の解析結果を発表したのは、中央制御室の計器に残された温度や圧力などのデータのほか、当

の温度は急激に上昇した。
約1時間半後には、全長約4㍍の燃料棒の水につかっている部分が完全になくなる「全露出」状態となつた。核燃料を包む金属の筒(被覆管)は、炉心の中央下にあるものから融け始め、20分ほどで炉心中

が完全に溶融(メルトダウン)していくことになる。解析ではほぼ1日分、事態の進行が速かつた。

(吉田晋、杉本崇)